

一人一人に確かな「話す力・聞く力」を身につけさせる

筑波大学助教授 甲斐雄一郎



「伝え合う」ことの目的

「一人一人」を大切に。それは、学校教育のすべての営みに共通する理念といってもよいだろう。しかし、これを国語科における「話すこと・聞くこと」の領域で考えよつとするならば、おのずとこの領域固有の課題換言するならば、「話すこと・聞くこと」の学習指導において「一人一人」を大切にすることの意味も見出されることになる。

もとより、それが多岐にわたることは間違いないが、ここでは、近年の日本の学校教育のさまざまな局面、とりわけ学力のあり方に再考を促すことになつた、PISAの考え方に基つて考えることにしたい。これは、OECDが三十余の国々の十五歳の生徒を対象として実施した、学習到達度調査である。

この調査の結果とそれをめぐる諸問題は、すでに各方面で議論されている。それらの中で、この小論で注目し

「確かな力」をどのようにとらえるか

このような文脈からみるならば、「話す力・聞く力」とは、子どもたちが自らの目的を実現する力である。そして、それぞれの目的を実現したときに、所期のねらいとしての「話す力・聞く力」は身につけていると判断することができる。その具体的なあり方を実践事例によってみるならば、次のようになるだろう。

「わたしは、なんでしょつ」(一年)の場合は、クイズに出題者として、あるいは回答者として参加して楽しむことができたならば、それが期待された「話す力・聞く力」が実現できた状態である。同じく、「伝言はまちがえずに」(四年)の場合は、的確に伝言し、また自分が受けた伝言を間違いなく必要な相手に伝えることができた状態を指す。「インタビュアー名人になろう」(五年)の場合は、聞き取り取材によつて相手の情報を受け取る「とができたならば、目的とした「話す力・聞く力」は身につけていると判断されるのである。

しかし、これらの目的の記述のしかたとそれぞれの実践事例に掲げられている授業のねらいとの間にはずれが感じられるのも、また事実である。

「わたしは、なんでしょつ」「おごては、」話題に沿つて話し合う活動」を展開すべきことが授業のねらいとそ

たいのは、PISAでは読解リテラシーを「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義している点である。

日本の国語教育において、近年「伝え合う力を高める」という課題が重く受け止められてきていることは明らかである。しかし、これをPISAの定義になぞらえてみるならば、「ために」の前の部分に着目することが大切であろう。「何のために伝え合うのか」という発想である。ここでは、特に「参加」という部分に注目したい。

「話す力・聞く力」を身につけさせるためには学習活動に参加することが不可欠である。さらに国語科の授業で身につけた「話す力・聞く力」は、「効果的に社会に参加する」ためのものであると考えるならば、「一人一人」を大切にすることの積極的な意味がさらに重視されることになるからである。

れている。「伝言はまちがえずに」において「身につけさせたい技能」として挙げられているのは、大事なことをメモして話す、聞き取りやすいように、はっきりゆっくり話す、大事なことをメモしながら聞く、聞き取れなかったことは、聞き返す、等の八項目である。「インタビュアー名人になろう」で挙げられているのは、「相手の話を聞き、それに関連させて話す力」である。これらそれぞれが、国語科としての「話すこと・聞くこと」の学習指導目標に即した重要なものであることは明らかである。したがって、「ここで問題となるのは、あるまとまりの活動に対する子どもたちの目的と、国語科としての学習指導目標とのずれの問題なのである。

子どもたちの参加の目的と、国語科としてのねらいとの関係について、「わたしは、なんでしょつ」の事例では次のように記されている。

「クイズ」は、質問したり、応答したりしながら、少しずつ正解がわかってくる過程を楽しみ言語活動である。正解がすぐにわかったり、最後までわからなかったりするのではないように、出題し、前の質問や応答の内容を受けて次の質問や応答をすることになり、子ども自らがやりとりが続くように協力する。話し合う活動が展開される「とが期待できる。

ここにみられるように、クイズを出し合う活動に参加して楽しむ、という子どもの目的を達する過程は、同時に国語科のねらいとしての「話題に沿って話し合う活動」を展開する過程なのである。他の事例についても、この関係をたやすく見出すことができるだろう。「話す力・聞く力」を身につけさせることをねらいとする授業においては、活動の目的と国語科としてのねらいとの二重構造を見出すことができるのである。

授業の準備のための二つの観点

(1) 話題の分析

「話す力・聞く力」を身につけさせることをねらいとする授業においては、活動の目的と国語科の授業としての目的との二重構造を見出すことは、そのまま、そのような授業を構想するうえでの教材研究を可能にする。そのことを、再び「わたしは、ななでじゅう」(一年)の例に即してみよう。ここでは、話題選定の重要性が次のように記されている。

一人一人に確かな「話す力・聞く力」を身につけさせるためには、「話したい」「聞きたい」「話し合いたい」という思いをもてる話題を設定しなくてはならない。「ここではどのような話題を「クイズ」にするかという点に注意。

めの教材研究なのである。それは、題材の分析とともに目的の分析の結果、明らかになる。第二時の場合の、大事なことは、新たに決定した場所と集合時間の二点である。話し手は、それをメモに基づいて落とさずに伝えることができ、聞き手もまた、それをメモすることができたならば、子どもにとっての当面の目的は達成することができたことになる。そして、評価をする立場の者も、メモや実際の伝言が伝言の目的に即して的確かどうかを判断することができるようになる。第三時において重点項目とされている、何について伝えるのかを、先に伝える。「という点も、大事なこと」が伝言の目的に照らして明瞭であったはじめて実現することができるのである。このように、活動の目的を分析することによって国語科としてのねらいが明瞭になるといつ構図は、「インタビュアー名人になる」(五年)の場合も同様である。例示されたインタビュアーの実際から想定される教材は、Aさんのクラブ活動の取り組みである。そして、それを知るためのインタビュアーを行ったならば、子どもの目的と国語科としてのねらいは、ともに達成されることになる。この時、初めの題材分析の結果として、入っているクラブ、クラブの人数、クラブに入った理由、そのクラブの活動内容、という四点が見出されている。

しかし、実践者が国語科の授業として設定したねらい

子どもの目的と授業の目的を同時に達成させる話題を教材と呼ぶことにするならば、クイズに出題する話題とその広がり、この授業における教材である。話題の広がりとは、読み聞かせをしてきたお話の登場人物をクイズの話題として選択した場合は、ヒントとして用いることになる。「登場人物の様子や言動」「気持ちなど」を指す。これらに即してヒントを作り、それらの配列の計画を立てたならば、子どもはクイズに出題者として参加することが可能になり、聞き手としての子どももまた、参加者として語られたヒントに即して解答の手がかりを得ることが出来る。教師も、そのような教材研究を通してヒントを生み出すポイントをいくつも用意することができているために、実践事例中に見られるように、ヒントの作成が困難な子どもに対する支援が可能になるのである。

(2) 目的の分析

では「伝言はまちがえず」(四年)の場合はどうだろうか。たとえば、第二時の活動の内容は、遊びの場所と集合時間が変わったことを伝えるである。ここでは、国語科の学習のねらいとして、先に挙げた「」が設定されている。子どもの目的とこれらの国語科のねらいとともに実現させる根拠となるのは、伝言の目的に即した「大事なこと」である。そこで、それぞれの伝言において、「大事なこと」が何なのかを考えることが、この授業のた

は、相手の話を聞き、それに関連させて話す力であった。これを言い換えるならば、相手の情報を豊かにふくらませることと言えるだろう。そして、どの情報をふくらませるのが適切なのかは、インタビュアーの目的がそれを決定する。当該の小学校でのクラブ活動の種類や規模、活動の概略を知るためのインタビュアーと、クラスメイトの活躍に重点を置いてその詳細を知るためのインタビュアーとは、ふくらませるべきポイントが異なってくるからである。後者に重点を置くこのインタビュアーにおいては、活動内容をふくらませるためにさらに分析されている。

それは、事前に行うことも可能である。しかし、この事例によるならば、対処能力の大きな子どもであれば、その場で行うことも可能になると思われる。

他の活動に生きる「話す力・聞く力」

「話す」と「聞く」と「読む」と「書く」の領域はもとより、他教科や総合的な学習の時間、特別活動に参加する子どもたちに生かされることになる。そのため、国語科としてのねらいを重視した授業が構想されるのである。そして、その準備として必要なのが話題の分析と目的の分析であるということ、これらの実践事例は示しているものと考えられる。